

「ソーシャルビジネス」に惹かれる若者たちと現代社会

著者	中武 貞文
雑誌名	地域政策科学研究
巻	10
ページ	49-67
別言語のタイトル	Contemporary society and young people's interest in social business
URL	http://hdl.handle.net/10232/16663

「ソーシャルビジネス」に惹かれる若者たちと現代社会

中武 貞文

Contemporary society and young people's interest in social business

Sadafumi NAKATAKE

Abstract

Currently, we are observing a new phenomenon where the younger generation are now more actively involved in local events and volunteer work, so-called social business, than before. Here we focus on social business internships, one branch of social business, while considering the historical background and overview of Japanese society. Using existing documents written by the non-profit organisation, ETIC, and interviewing a random sample of university students, we were able to ascertain the following facts:

- 1) Social business is a global trend and it is reflected in political policy.
- 2) Social business has spread throughout Japan.

We also found that awareness of the issue can be seen in the following:

- 1) There is a demand for social entrepreneurialism.
- 2) University students recognize social business internships as a tool in job hunting.
- 3) Taken from the student interviews, there is a possibility that knowledge about social business internships is spreading in Japan.

キーワード： 1. ソーシャルビジネス, 2. インターンシップ, 3. 大学生

Key Words : 1. social business, 2. internship, 3. a university student

1. はじめに

2011年7月9日、東京都内の某所に30名の若者が集まった。20歳代から30歳代前半の学生と社会人からなるそのグループは、鹿児島県南さつま市の活性化をどう考えるかを語り合っていた。議論の中心は、目前に迫った東京品川での「品川宿場祭り」において、南さつま市の物産のPRをどうするかであった。この「さつますんくじら¹のめぐみ」事業を仕掛けたのは、東

1 「すんくじら」とは、鹿児島地域にて使用される方言、「隅っこ」や「端」の意。鹿児島県南さつま市を「日本の隅っこ」と印象づけるためプロジェクトにて採用した語である。

京で地域づくり人材を育成する業を行っている街オリ株式会社²の代表、佐々木文平氏である。南さつま市で立ち上がった運動の東京での支援体制を構築するにあたり、支援人材を確保するために佐々木氏が鹿児島出身の大学生に呼びかけたところ、鹿児島出身以外の学生や社会人が続々とこの取り組みに参加することとなった。写真1は、その時の打ち合わせ風景である。



写真1 東京都内某所で行われた「さつますんくじらのめぐみ」プロジェクトの打ち合わせ風景 (佐々木文平氏提供)

一方、東京から離れること約1,000km、鹿児島市のインキュベーション施設であるソーホー鹿児島³の会議室では、NPO マチトピラ⁴の末吉氏が、大学生を相手に「ソーシャルビジネス・インターンシップ」について説明を行っていた。説明に聞き入る多くの大学生たちの目は真剣そのものである。従来の企業への就業体験「インターンシップ」とは異なる、まちづくりや地域での就業体験「ソーシャルビジネス・インターンシップ」への参加が、彼らの目的である。

「なんとか地域を盛り上げたい。」「地域に恩返しをしたい。」 - 彼ら、彼女らが、共通に口にするフレーズに高揚感と違和感を抱いたことが本研究の起点となっている。このソーシャルビジネス・インターンシップに向き合う大学生たちの高揚感については、櫻井の報告(桜井芳生, 2012)に詳しく記されている。筆者が感じる違和感は、自分が学生であった頃の時代と現代との違いによると大枠には推測できるが、この内容をより詳細に明らかにしたいと考えたのが、本研究の出発点である。あわせて、筆者がこれまで進めてきた産学連携や地域連携活動に10年ほど携わってきた経験においても、この違和感と重なる類似の事象を確認することがあったことも、この動機を強化するものであった。

これらを念頭に、本稿では、大学生に代表される若者が、なぜソーシャルビジネスに惹かれ、向かおうとしているのかを、「ソーシャルビジネスそのもの」への参画契機としての一形態である「ソーシャルビジネス・インターンシップ」を対象素材として観察、分析し、その特徴を明らかにしようとするものである。この検討のために、主に2つの素材を使用する。一つは、既存資料「地域社会におけるソーシャルビジネス(SB)⁵に関する人材育成プログラムの開発・実施とその意義」⁶(佐藤真久, 2012)、そして鹿児島県での筆者が行った大学生へのインタビュー調査結果(後述; 3.『報告書』とインタビューによる分析)である。これらを通じて得た知

2 株式会社街オリ <http://machi ori.jp/> (検索日 2012年9月28日)。

3 新たなベンチャービジネスの展開や新規創業を促進し、本市(鹿児島市)経済の活性化を図ることを目的に、SOHO事業者やSOHOを目指す市民を育成支援するための拠点施設が「ソーホーかごしま」であり、平成16年12月から供用開始されている。なお、ソーホー(SOHO)とは、Small Office Home Officeの略で、パソコンやインターネットを活用して自宅や小規模な事業所を拠点に事業を手がける事業者や働き方のこと。(「ソーホー鹿児島」ホームページ <http://www.soho-kagoshima.com/guide.html> より) (検索日 2012年9月28日)。

4 NPO マチトピラ <http://machitobira.org/> (検索日 2012年9月28日)。

5 本稿においては以後、ソーシャルビジネスのことを「SB」と表記することがあることを断っておく。

6 本稿においては以後、この「地域社会におけるソーシャルビジネス(SB)に関する人材育成プログラムの開発・実施とその意義」を「報告書」と呼ぶ。

見・情報を整理し、以前は存在していなかった「ソーシャルビジネス・インターンシップ」という現象に関する筆者の事実認識と問題意識を提示することを本稿の目的⁷とする。本稿は、「2. ソーシャルビジネス・インターンシップとは」において全体を概観した後に、「3. 『報告書』とインタビューによる分析」にて、前述の2つの素材を活用した分析を行い、「4. 終わりに」で事実認識と問題意識を示す構成とする。

2. ソーシャルビジネス (SB)・インターンシップとは

「地域社会におけるソーシャルビジネス (SB) に関する人材育成プログラムの開発・実施とその意義」(佐藤真久, 2012) という「報告書」には、内閣府の支援を受けた NPO 法人 ETIC. が実施した「ソーシャルビジネス・インターンシップ」事業の総括が、ソーシャルビジネス・インターンシップに関する64本の論文、40冊の図書を先行研究、参考情報としながらまとめられている。この「報告書」は、現時点において、我が国の「ソーシャルビジネス・インターンシップ」事業を包括的に網羅し、その背景、実態把握、効果分析を行った初めての資料である。

本章では、この「報告書」と、他の公開情報をもとに、ソーシャルビジネス・インターンシップを概観する。この概観に際しては、二つのキーワードで読み解くことを試みる。一つは「ETIC.」、もう一つは「政策」である。ソーシャルビジネス・インターンシップ事業の駆動力となった NPO 法人 ETIC. と、その背景にある政策を捉えておくことは、地域におけるソーシャルビジネス・インターンシップの展開を語る基盤として必要である。

まず NPO 法人 ETIC. について述べる。前述の「報告書」とホームページ(「NPO 法人 ETIC.」ホームページ)を見るとこうある。「ETIC. は1993年に起業家を目指す学生のネットワークとして活動を開始し、1997年に日本で初めて長期実践型インターンシップ事業を開始した。」とある。さらに続けると「未来に新しい価値を産み出す創業経営者の右腕として、半年間、真剣勝負の場で、共に挑戦をしながら修行するというコンセプトのもと、1997年よりアントレプレナー・インターンシップ・プログラム (EIP) を開始した。」とある。これらから、当初は、ソーシャルビジネスという色彩は薄く、創業経験者、起業家から学生が学びを得ようとしていたことが見えてくる。この流れは今も継続されており、この EIP プログラムは、2012年度現在、15期生を迎え、参加学生は2,600名、受入企業・団体は延べ800社以上の規模を有する事業となっている。このように、大学生と「大学外」とを接続する「仕掛け」と「ノウハウ」を有していたことが、現在のソーシャルビジネス・インターンシップ事業にも活用されている。ちなみに、ETIC. がソーシャルビジネスの要素を取り入れたのは2002年、日本初のソーシャルビジネスブランドコンテスト「STYLE」を開催したことが最初のものである。そして2004年からは、地域の担い手を育成し、地域の活性化に繋げていく長期実践型インターンシップ事業「チャレンジコミュニティ・プロジェクト」の全国展開を図っている。この事業への参加者は、現在、42地

7 この研究の延長線上には、日本に留まらず、アジア地域や米国、欧州の事例まで、研究対象を発展させることを見据えている。急速に進みつつある少子高齢化という経験したことのない環境変動が、日本の地方都市で進みつつあり、鹿児島県においては特に顕著である。すなわち、鹿児島で起こっている事象は世界的にも先進的で、これらの事象が、その地域に住む大学生の行動に何らかの影響を与えている可能性も充分に考えられる。この事象を捉えることは、今後の高齢化を控える国々の有用な知見となり得ると考えている。

域で年間1,800名、企業1,500社となっている。この活動は、日本におけるソーシャルビジネス・インターンシップの起源であり、標準となっている。

次に、政策という観点で、ソーシャルビジネスに関係する動きを見ていく。「ソーシャルビジネスは『新しい公共』の重要な担い手になると考えられる。」と近年の政策資料には記載されることが多く、「ソーシャルビジネス」に関連づけられる「新しい公共」という言葉が政策の中でどう扱われているかを確認する必要がある。自民党から民主党へ政権が交代した2009年（平成21年）、鳩山由紀夫首相（当時）は、平成21年10月の第173国会において、その所信表明演説の中で「新しい公共」という考え方を次のように述べている。

20世紀は、経済社会システムにおいて行政が大きな役割を担ってきた。しかしながら、経済社会が成熟するにつれ、個人の価値観は多様化し、行政の一元的判断に基づく「上からの公益の実施では社会のニーズが満たされなくなってきました。そして現在、官民の役割分担の見直しが行われ、民間企業や個人と並んでNPOなどの民間セクターが重要な役割を担いつつあります。これまでの行政により独占的に担われてきた「公共」を、これからは市民・事業者・行政の協同によって「公共」を実現しなければなりません。

（鳩山由紀夫，2009）

この演説以降、「新しい公共」の考えが明文化された「宣言」（「新しい公共」宣言，2010、「私たちの社会的責任」宣言～「協同の力」で新しい公共を実現する～，2010）と、その宣言に立脚した各種施策が展開されるようになる。

「公共」については、社会科学の各分野で議論が活発に行われているが、特にその動きは1990年中葉以降、高揚してきていることが山口ら（山口、佐藤、中島、&小関，2003）によって明らかされている。そして、本稿に関係する「新しい公共」政策については、菅原（菅原，2011）が、その政権と政策との関係について明らかにしている。この中で菅原は、[新しい公共]の「新しい」という語に着目し、この「新しい」に「ニーズ」、「登場人物」、「場」という3つの意味を持たせた分析を行っている。

鳩山首相の演説の後、より一層、「ソーシャルビジネス」への重点的な予算投下が行われるようになった。先にETICの経緯を説明する中で紹介した「チャレンジコミュニティ・プロジェクト」は、内閣府の「地域社会雇用創造事業」へと受け継がれ、それらの活動実績や分析結果が先の「報告書」にまとめられたという経緯がある。「起業家を目指す学生達の集まり」が独自の発展を遂げ、「ソーシャルビジネス（SB）」という領域において、政策との接点を有するようになったという点については興味深い。

本稿で取り上げる重要な用語である「ソーシャルビジネス」について確認をしておく。経済産業省の「『新しい公共』の促進に向けた取組について」（経済産業省，2010）によると、「障害者支援、子育て支援、貧困問題解決、ホームレス支援、環境保護、まちづくり・まちおこし、地域活性化、国際交流、フェアトレードのような社会的課題をビジネスの手法で解決する持続的な事業活動。ソーシャルビジネスは、社会的課題の解決に対して事業性を見出し、『新たな産業・新たな働き方』を創出する主体。このような活動が、行政、企業、市民の協働パートナー

となることが期待される。」と位置づけられている。さらに、「政府が掲げる『新しい公共』の重要な担い手のひとつ」と期待感を込めた踏み込んだ記載も見られる。

日本における事例としては、「ソーシャルビジネス55選」(経済産業省, 2009)に文字通り55のソーシャルビジネス事例の掲載があるが、前述の「『新しい公共』の促進に向けた取組について」には、以下に示す4事業が代表事例として取り上げられている。日本で最も有名になった「葉っぱビジネス」の株式会社いどり、都市と農村の交流をグリーンツーリズムとして事業に発展させた農業法人(株)秋津野、障害者の自立を本当においしい商品づくりを通じてビジネスにまで昇華させたNPO法人パンドラの会、採算の合わないという困難さを創意工夫によって克服したNPO法人フローレンス、どの事業も雇用を着実に産み出し、地域に根ざそうとしている。このようなソーシャルビジネスの主体はNPO法人が担うことが多い。前述の4事業のうち、2つがNPO法人によるものであった。そこで、全国におけるNPO法人の法人数を、内閣府の統計で確認すると、1998年のNPO法の施行以来、NPO法人の認証数累計は年々拡大し、2000年には3,156法人であったが、2009年には38,997法人にまで増加している。

九州・鹿児島に目を転じて、ソーシャルビジネスは浸透し始めている。前述の「ソーシャルビジネス55選」には、表1に示す8つの事業が九州から選定されており、うち1つが鹿児島の事業である。この鹿児島の事業の中核となっているネイチャリング・プロジェクト⁸は、本稿にも深く関係している。鹿児島地域でソーシャルビジネス・インターンシップ事業を展開しているNPO法人マチトピラの創始者は、このネイチャリング・プロジェクトから輩出されている。先端的な事例ではあるが、地域への浸透とネットワークの拡大についての様子を知ることができる。また、九州では、ここに挙げたNPO法人を中心として、「九州の社会起業家ネットワーク - SINKa - 」⁹という団体も2007年に設立され、社会起業家を希望する人材への支援事業を開始しており、ソーシャルビジネス拡大の素地が整備されつつある。

表1 九州地域の「ソーシャルビジネス55選」掲載事業

名称	都道府県	分野
特定非営利活動法人 えふネット福岡	福岡	地域活性化・まちづくり
株式会社 フラウ	福岡	子育て支援
特定非営利活動法人 循環生活研究所	福岡	環境保護・保全
特定非営利活動法人 里山を考える会	福岡	環境保護・保全
特定非営利活動法人 宮崎文化本舗	宮崎	地域活性化・まちづくり
ネイチャリング・プロジェクト	鹿児島	教育・人材育成
有限会社 やんばる自然塾	沖縄	観光
特定非営利活動法人 島の風	沖縄	観光

備考)「ソーシャルビジネス55選」(経済産業省, 2009)より、九州地域の事業について掲載されている事業を筆者が編集した。

8 NPO法人ネイチャリング・プロジェクト <http://www.naturing.org/> (検索日 2012年9月28日)。

9 九州の社会起業家ネットワーク - SINKa - <http://www.sinkweb.net/> (検索日 2012年11月19日)。

次に学術の観点から、ソーシャルビジネス、若しくはソーシャル・イノベーションについての先行研究をみると、現象と理論の系譜については大室（大室，2009）が、そして、市民運動型 NPO 法人の可能性について谷本（谷本，1998）が報告している。大室は、ソーシャル・イノベーションを次の4つに類型化している。その分類とは、「多様な社会的課題に対して企業や NPO / NGO などの主体が見出す解決策」、「企業と社会の関係（新しい社会サービスの供給や社会責任による社会経済システム，消費社会の変化）」、「マクロの制度改革を通じた社会課題の解決」、「公共政策の変革を通じた社会課題の解決」である。個々の事例を対象とするミクロな領域から、社会制度というマクロな領域まで、ソーシャル・イノベーションの概念が適用できることを示している。この分類に照らすと、本稿で対象とする「ソーシャルビジネス・インターンシップ」は、「多様な社会的課題に対して企業や NPO / NGO などの主体が見出す解決策」に該当する事業と考えられる。そして、これらの事業を運営する NPO 法人が成長，発展している現状は、谷本が言うところの「市民が自らの関心から，政府や企業が取り込んだあるいは解決しえなかった公共的な問題に取り組み，組織し活動していく」市民運動型 NPO 法人の可能性についての指摘と符号している。この他，一般書も出版されている。中でも町田の著書「社会起業家 - 『よい社会』をつくる人たち」（町田洋次，2004）は，英国の事例を基に「ソーシャル・アントレプレナー」を「社会起業家」として紹介したものであると，その出版の意義の大きさについて川本（川本，2007）は述べている。

新聞記事を遡ると，日本の主要紙（日経新聞，朝日新聞，毎日新聞，読売新聞，産経新聞）で初めて「ソーシャルビジネス」という言葉が扱われたのは，2001年4月11日の朝日新聞「増えるコミュニティービジネス ご近所や友人で起業」という記事である。この記事では，「コミュニティービジネス」¹⁰ が都心で展開されはじめたというニュースを報じる一方で，「欧米ではソーシャルビジネスなどと呼ばれ，80年代から盛んになってきている」と紹介されている。しかし，この記事の後，「ソーシャルビジネス」という語は，新聞紙面に登場することはなく，2006年のグラミン銀行とユヌス教授のノーベル平和賞受賞まで待つこととなる。バングラデシュにおいて「マイクロクレジット」という制度を考案，実践したムハマド・ユヌス教授は，その「グラミン銀行」とともに2006年度にノーベル平和賞を受賞する。これらについては日本でも多くの研究者が論文（坪井，2006；松井，2004；水口，2003）および著書（坪井ひろみ，2006；ムハマド・ユヌス，岡田昌治 & 千葉敏生，2010；ムハマド・ユヌス & 猪熊弘子，2008）他を発表している。その詳細についてはそれらに譲るが，ここではその内容ではなく，こういった社会課題をビジネス手法で解決しようとする一連の活動が「ソーシャルビジネス」という言葉で表現され，さらに，そのイメージが論文，著書，そしてユヌス氏のノーベル賞受賞を契機に，テレビや新聞といったメディアを介して世界中に拡散したことを重視したい。さらにユヌス氏を中心にソーシャルビジネスに関する国際的な会合が Global Social Business Summit として

10 経済産業省関東経済産業局のホームページ <http://www.kanto.meti.go.jp/seisaku/community/index.html>（検索日 2012年9月28日）によると，「コミュニティービジネスは，地域資源を活かしながら地域課題の解決を「ビジネス」の手法で取り組むものであり，地域の人材やノウハウ，施設，資金を活用することにより，地域における新たな創業や雇用の創出，働きがい，生きがいを生み出し，地域コミュニティの活性化に寄与するものと期待されています。」とあり，ソーシャルビジネスよりもさらに，局所的な取り組みと位置づけられていることがわかる。

2009年から年1回開催されるなど世界的なネットワークも形成されはじめていることにも言及しておく。

次いで、大学生を含む若者とソーシャルビジネスの関係性を示す2つの事例を紹介する。一つ目は、「ソーシャルビジネスグランプリ」事業である。この事業は、リソウル株式会社¹¹が運営する社会起業家を育成する社会人対象のビジネススクール「社会起業家大学」の取り組みの一環として、2010年から毎年2回（夏、冬）、開催されているソーシャルビジネスに関するビジネスプランのコンテストである。「ビジネススクール」を標榜している民間企業の運営であることから、よりビジネス実践志向の強い取り組みである。立ち上がって2年を経過したに過ぎないが、ホームページなどの情報発信体制も充実している。ホームページに掲載されたこのグランプリの解説をみるとこうある。

「ソーシャルビジネスグランプリは、社会人学生が4ヶ月の学習期間でブラッシュアップしてきた事業計画と、一般参加者が応募された事業計画の中から、最終選考で選ばれた6名のファイナリストが社会的事業をプレゼンテーションします。未来の社会起業家が誕生する一瞬を見届けるため、北は北海道、南は沖縄まで、日本各地から一般の観客が集まります。」
（“社会起業家大学” ホームページより）

引用部後半にある「社会起業家が誕生する一瞬を見届ける」という点に注目したい。このソーシャルビジネスグランプリ事業は、「事業計画（ビジネスプラン）」の優劣を決めることが主目的ではなく、それを産み出す未来の社会起業家という「人材」の誕生に重きが置かれている。これに加え、さらに、「見届ける」という直接的な利害関係者とは異なる第三者の参画・存在が意図されている点をあわせて考えると、「事業計画」の新規性・市場性が評価される一般のビジネスプランコンテスト¹²と異なる特徴を有すると考えられる。

さらにもう一つの事業「社会イノベーター公志園」についてみてみよう。この事業は、ソーシャルビジネスグランプリとほぼ同じ時期の2011年から開始された事業である。以下、ホームページにある「社会イノベーター公志園とは」にこうある。

- ・地域コミュニティ、日本、社会、さらには世界が直面する経済社会の課題
 - ・市場メカニズムや行政といったアプローチのみでは、十分に解決されえない課題
 - ・人が不安や不満を感じたり、おかしいと感じたりするのに、放置されている課題
- そんな経済社会の課題を、従来にないアプローチで解決せんと挑戦している社会イノベーター達が全国から集まるのが、社会イノベーター公志園です。社会イノベーターが集い、ともに切磋琢磨する...そんな社会イノベーターたちに、心から声援を送り、同時に、自らも問題意識を高め、気づきと勇気もらい、自分自身の今後の生き方を考える...挑戦者たちと、支援者、さらには観客が、一体となって、日本と世界の未来を創りだす。

11 リソウル株式会社のホームページ <http://www.resoul.jp/>（検索日2012年9月28日）。

12 例えば、「University Venture Grand Prix 2012」 <http://www.jeenet.jp/2012/09/10/24zf-uvvg2012-team/>（検索日 2012年9月28日）など。

そんな舞台が、日本にはじめて生まれます。

(“社会イノベーター公志園” ホームページより)

この「社会イノベーター公志園」事業は、高校生の野球の目標である「甲子園¹³」に重ね合わせられている。参画形態は、挑戦者と支援者、そして観客という区分けがなされている。さらに公志園の解説には、「甲子園大会において、球児が地元の支援者、監督やコーチに支えられ、観衆の声援に背中を押されながら、自身の全力を尽くし、成長を遂げていきます。」とあり、球児に相当するソーシャルビジネスへの挑戦者だけでなく、その周囲もまた参画者であるとしている。この構図からも、ビジネスプランという価値提案そのものではなく、価値提案を行う人材・ヒト、それを支える人材へのフォーカスがなされている。

前述の「ソーシャルビジネスグランプリ事業」と「社会イノベーター公志園」は、どちらも事業そのものではなく人材に焦点があてられている。この点について筆者は、ソーシャルビジネス人材を作り出し、社会に押し出そうという装置・演出が、今の時代に存在している可能性を問題意識として有しており、本稿とは別に検討を行っているが、結論に至っていないため、本稿においては、可能性の提示に留める。

世界的なソーシャルビジネス勃興、そして「新しい公共」政策の後押し、さらには社会全体の演出の可能性、これらが若者、そして大学生たちがソーシャルビジネスの一端となるソーシャルビジネス・インターンシップに参加する背景ではないかというのが、筆者の大きな仮説である。

しかし、この仮説の検証には困難な問題が控えている。それは、「ソーシャルビジネス・インターンシップの密室性、そして局所性と一般性の共存」である。ソーシャルビジネス・インターンシップ事業は、参加する学生、受け入れる企業、そして仲介組織の3者の閉ざされた空間にて行われており、大学教員であってもその内容を知るには努力を要する。現状、多くのソーシャルビジネス・インターンシップは単位認定を受けない、いわば大学の正規のカリキュラムではなく、長期休暇等を活用した学生の自由意思による参加によって成り立っている。そのため、大学側も正確に学生の動きを捉えることができない。そのため、ソーシャルビジネス・インターンシップ参加後の学生の劇的变化に驚く教員もいる。これら密室性のため、研究フィールドの獲得は容易ではない。そして、それらを乗り越えて研究フィールドを獲得したとしても、ソーシャルビジネス・インターンシップ事業がある特定のNPO法人、ETIC. という組織の周辺で限定的に展開されているため、局所の特徴の観察という危険性も懸念される。しかしながら、既出のとおり、NPO法人ETIC. が、日本のソーシャルビジネス・インターンシップ事業をリードしてきた経緯を考慮すると、この事業は、一般性という特徴をも同時に有していると筆者は考えている。そのため、まず既出の「報告書」の分析を行い、ソーシャルビジネス・インターンシップ事業の全体を概観した上で、「報告書」にも登場するNPO法人マチトピラの主

13 「甲子園」とは、兵庫県西宮市にある阪神甲子園球場の通称である。この阪神甲子園球場では、毎年、春季に選抜高等学校野球大会（毎日新聞社、日本高等学校野球連盟主催）、夏に全国高等学校野球大会（主催：朝日新聞社、日本高等学校野球連盟）が開催されており、予選を勝ち抜いた高校の野球部が日本一を目指し競っている。予選を勝ち抜き出場を勝ち取った高等学校にとっては、野球の試合という範疇を超えた学校行事、地域行事としての色彩が強い。

催するインターンシップ事業に参加した大学生へのインタビューを行うというアプローチを採用し、ソーシャルビジネス・インターンシップ周辺に存在する事実と問題意識を明らかにしようとしてみた。「報告書」分析およびインタビュー結果については、次章以降に記す。

3. 『報告書』とインタビューによる分析

「報告書」は、第一部「本研究の背景と目的・方法」、第二部「[学びの評価] 枠組みの理論的根拠」、第三部「[学びの評価] の分析結果」、第四部「[プロジェクトマネジメント] の分析結果」から構成されている。第三部「[学びの評価] の分析結果」にて、ソーシャルビジネス・インターンシップに参加した学生のソーシャルビジネス・インターンシップ参加前後の学びの変化について、コンピテンシーとエンパワメントという二つの側面から分析している。コンピテンシー（キー・コンピテンシー）については、「人生の成功と正常に機能する社会の実現を高いレベルで達成する個人の特性」とOECD（経済協力開発機構）の暫定的定義で捉え、エンパワメントについては、「成長発展における学習の深まりの段階的プロセス」として取り扱っている。コンピテンシーについては学生の Web アンケート、エンパワメントについては、日報と呼ばれるインターンシップ参加者の活動記録からの分析が行われている。しかしながら、参加動機、周辺環境についての分析は充分ではない。そこで、これらの中から直接的な動機、動機に関連する事象、周辺からの影響に該当する記述を抽出することを試みた。

「報告書」には、4名のインターンシップ参加者の記録が記載されている。「報告書」より抜粋した「動機」に関する記録の取りまとめが表2である。動機に関する部分については、観察者の間接的な記述でしかないものの、その概要を確認することができる。

S.H.さん（女性）のインターンシップ参加の動機をみるとこうある。「部活・サークルなどの活動を何もしていなかったことから、参加するきっかけとなる。」とある。S.S.さん（男性）は「時間をもてあまし、どう時間をつかったらよいかわからなかったため」とある。そして、T.K.さん（男性）は「社会にでることに不安があった。」と述べている。これらは非常に単純な内容で留まっているが、M.N.さん（女性）は、前述の3名の単純なコメントを越える真情を吐露している。一つは、「サークルの先輩が、インターン前は教室の隅っこで本を読んでいるような人だったのに、インターン後、人前で堂々と話が出来るようになった姿が印象的だったから。」とあるとおり、同じ世代の行動に影響を受けていること、そして、「小さい頃から自分自身に対する評価が低く、否定的だったことが嫌で、自分を変えたい、自分のことを知りたい、自分の可能性を知りたいと思ったから。」と、変革欲求を発露しているとも受け取れる発言となっている。

これら4名の動機の背景には、「就職」や「就職活動（就活）」¹⁴があると考えられる。大学生が「就職」という呪縛に苛まれているか、強いプレッシャーを受けていることは、これまでの研究（吉田 et al., 2010）でも指摘されている。

14 「就活」は就職活動を単に省略した意だけでなく、言葉を使用する側、特に大学生が特別の意味を込めて使用している可能性がある。そのため、本稿においては特に説明を行わない時は「就職活動（就活）」とまとめて扱うが、インタビュー調査等において、その文脈から別の意味が付加されたり、意味が変化していると判断される場合には、「就活」若しくは「シューカツ」と表すこととする。

表2 「報告書」に登場した大学生のSB・インターンシップ参加に関する動機

氏名	居住地、学部・学年等	SB・インターンシップ参加の動機
S.H. (女性)	北海道、経営学部2年	<ul style="list-style-type: none"> ・ゼミ生によるインターンシップ・プログラムの紹介があった。 ・部活・サークルなどの活動を何もしていなかったことから、参加するきっかけとなる。
S.S. (男性)	北海道、経営学部1年	<ul style="list-style-type: none"> ・時間をもてあまし、どう時間を使ったらよいかわからなかったため。
T.K. (男性)	沖縄、産業情報学部3年	<ul style="list-style-type: none"> ・どういう仕事が向いているかわからず、社会にでることに不安があった。
M.N. (女性)	沖縄、経済学部1年	<ul style="list-style-type: none"> ・サークルの先輩が、インターン前は教室の隅っこで本を読んでいるような人だったのに、インターン後、人前で堂々と話が出来るようになった姿が印象的だったから。 ・小さい頃から自分自身に対する評価が低く、否定的だったことが嫌で、自分を変えたい、自分のことを知りたい、自分の可能性を知りたいと思ったから。

このように「報告書」に記載された情報だけでも、ソーシャルビジネス・インターンシップに参加する大学生の動機に繋がるヒントを抽出することができた。このヒントを活用し、前述の「報告書」に記載された事項や事実を補うべく、鹿児島県に居住するソーシャルビジネス・インターンシップに参加した大学生を対象としてインタビュー調査を試みた。インタビュー調査の概要については表3に記す。ソーシャルビジネス・インターンシップに関する質問項目を11設問用意し、動機、参加前後の変化、関係・影響を与えた人は誰かなど、動機に関する情報を引き出す設問とした。そして、先の「報告書」記載情報の抽出を受け、就職活動に関する質問（質問番号9、10、11）を設定した。また、社会活動に関する経験が大学生の行動に影響を与えることも視野に入れ、これまでの社会活動に関する経験（質問番号5、6）を加えた。そしてインタビューの形態として、質問から引き出された回答に対して、さらに問いを投げかける、または自発的な発言を導くよう配慮する手法を採用した。

今回、4名の大学生のインタビューを行った。インタビュー調査の背景、経緯および4名の大学生に関する情報を以下に述べる。鹿児島県では、NPO マチトピラがソーシャルビジネス・インターンシップ事業を展開している。内閣府が支援・助成するソーシャルビジネス・インターンシップ事業の総括的役割をNPO 法人ETIC. が担っており、各地方で事業を推進する地域事務局の役割をNPO マチトピラに代表される地域のNPO 法人等が担っている。前述の「報告書」によると、このような地域事務局組織は、全国で14ある。そのため、鹿児島県の大学生を対象にすることは、NPO 法人ETIC. が行っているソーシャルビジネス・インターンシップ事業の地域部分（地域事務局部分）を観察することとなる。次に、経緯について述べる。筆者の所属する鹿児島大学のS教授が担当する講義「キャリア・恋人・コミュニケーションの社会学」の

表3 インタビュー調査の概要

調査項目等	内 容
調査目的	ソーシャルビジネス・インターンシップへの参加動機や経緯について質的な要因を捉えることを目的とした。
調査対象	ソーシャルビジネス・インターンシップへの参加経験者4名を対象とした。
調査方法	1名につき1時間程度にわたって想定した質問を問う形態を取ったが、回答者の回答にあわせてさらに尋ねる半構造化インタビューとした。
調査日時	2012年9月13日, 18日, 20日
調査場所	4名とも鹿児島大学産学官連携推進センターミーティングルームにてインタビューを行った。
記録形態	ICレコーダーによる音声記録, テキストによる書き起こし。
想定質問	<p>【基本的情報】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 氏名を教えてください。 2. 年齢を教えてください。 3. 所属と学年を教えてください。 4. 出身地を教えてください。 <p>【これまでの社会活動に関する経験】</p> <ol style="list-style-type: none"> 5. これまでのサークル活動の有無について教えてください。 6. これまでのボランティア活動や町内会活動経験について教えてください。 <p>【現状の興味】</p> <ol style="list-style-type: none"> 8. 今, 大学で興味のある「もの」や「こと」について教えてください。 <p>【就職活動に関する意識】</p> <ol style="list-style-type: none"> 9. 就職活動についての考え方, イメージについて教えてください。 10. 自分は何に向けていると思いますか? 11. どんな社会人になりたいと考えていますか? <p>【ソーシャルビジネスに関する項目】</p> <ol style="list-style-type: none"> 12. ソーシャルビジネス・インターンシップに参加した理由ときっかけを教えてください。 14. ソーシャルビジネス・インターンシップで一番お世話になった方は誰ですか? 15. インターンシップでよかったことを教えてください。 16. インターンシップでいやだったことを教えてください。 17. インターンシップで「得たもの」を教えてください。 18. ソーシャルビジネス・インターンシップの前後, あなたに変化はありましたか? 19. 尊敬している社会人, 格好いい社会人をあげるとすれば誰かを教えてください。 20. 「ソーシャルビジネス」に就職したいですか? 21. 鹿児島はこれからどうなると思いますか? 22. ソーシャルビジネス・インターンシップにいていない学生に対して何かコメントをお願いします。 23. ソーシャルビジネス・インターンシップで自分はどう変わったと考えますか?

受講者が、ソーシャルビジネス・インターンシップに参加しているとの事前情報を、筆者は得た。そのため、S教授に協力を依頼し、前述の講義受講生の中からソーシャルビジネス・インターンシップに参加した可能性のある大学生にインタビュー調査への協力を呼びかけた。その呼びかけに応じたのが、今回の4名の大学生であった。結果、インタビューイが同じ学部・学

科の専攻であること、性別も女性に限定されたことなど、取得したデータには偏り¹⁵があると考えている。そのため、今回のインタビュー調査結果からは、「ある特定集団の特徴」しか語るができない。しかしながら、かつては存在していなかった「ソーシャルビジネス・インターンシップ」という現象や背景を明らかにしようとする先駆的な調査研究であるという点において、「ある特定集団の特徴」を獲得することは、一般化に向けての基礎知見としての意味があるものと考えている。

そのソーシャルビジネス・インターンシップへの参加動機に関する発言の概要については表4に示した。表4から、参加動機に「就職活動（就活）」が関係している発言を複数捉えている。例えば、「『就活』のネタ」という言葉を2名が発している。この「『就活』のネタ」という表現は、「就職したい企業に対して自らの価値を高めるためのエピソード」という意味で用いられていると、筆者はインタビューを通じて分析している。インタビューの中には「私、サークルも、部活もしていないから『就活』のネタがなくて困っています。ネタを作ろうと、海外留学も考えたこともあります。」と発言する者もいた。近年の大学生の行動について、豊田は、「彼らは、やがて来る就活に備え、『自己PR』の材料を作り出すかのように行動しているのだ。」とその著書「就活エリートの迷走」（豊田義博, 2010）(p97)の中で指摘しているが、その指摘内容と合致する発言・行動が今回の調査で観察されている。

表4 インタビューを行ったSB・インターンシップ参加者の概要

氏名	居住地、学部・学年等	SB・インターンシップ参加の動機
A.A.(女性)	鹿児島，法文学部3年	・「就活」のネタになると思って参加した。
A.B.(女性)	鹿児島，法文学部3年	・講義でソーシャルビジネス・インターンシップの事を知り、「キラキラした大人」に憧れて参加した。 ・夏休みをダラダラ過ごすくらいならやった方がいいと思って参加した。
A.C.(女性)	鹿児島，法文学部3年	・S先生の授業でソーシャルビジネス・インターンシップの紹介があり、「就活」のネタになると思って参加した。 ・先輩や同期がやっているのをみて「やばい」と思ったから。
A.D.(女性)	鹿児島，法文学部3年	・S先生の講義でソーシャルビジネス・インターンシップの紹介があった。最初はあまり乗り気がしなかったが、後輩が先に参加してその成果発表を聞いてスイッチが入った。

備考) なお、氏名の表記については、本稿においては匿名性を確保するため A.A. といった記号表記を用いている。

15 ソーシャルビジネス・インターンシップへの参加傾向について、性差や専攻等が関係するとの報告は未だ行われていない。今後、量的的手法を用いて検討を行い、今回の取得データの偏り、そしてソーシャルビジネス・インターンシップ参加者全体の特性や傾向を明らかにする計画である。

ここから、「報告書」や先の概要にて獲得した知見である「『就活』のネタ」と「周囲からの影響」という項目に焦点をあて、4名のインタビューの中からA.A.さんを選択し、そのインタビュー記録から分析を質的に試みることにする。

A.A.さんは、法文学部3年生の女性、ソーシャルビジネス・インターンシップに「『就活』のネタ」作りのために参加した学生である。

表5 A.A.さん（女性）へのインタビュー抜粋1

<p>質問者：就職に話題を変えたいんですが、就職について考えていることはありますか？</p> <p>回答者 A.A.：就職は・・・厳しいだろうなというイメージです・・・私のイメージでは、なんかこう、大学名が強いかなと、うちの大学(のレベル)を考えると・・・何かしていないといけないと思って、インターンに行きました。元々の理由はそこです。</p> <p>質問者：何かやっておかないといけない？</p> <p>回答者 A.A.：はい、S先生の授業で「(就活で有利になる)ネタを作っておきなさい」みたいな・・・留学した人とかサークル、部活で本当に一生懸命やって結果を出そうとやっている人もいる中で、私、何もしていないなあと・・・バイトぐらいかなあと思ったので・・・そのときに夏に(インターンシップを)やっている子がいて、いろいろ話とかも聞いていたので、時間もあつたし、春休みに行こうと思って・・・</p>

注1) 質問者、回答者の話し言葉を直接記述したが、前後の文脈から補足が必要と思われる箇所には括弧 () 内に情報を補足した。

注2) 重要と思われる箇所には文字の上に黒点を付した。

注3) 会話の内容が途切れる空白箇所は「・・・」で表した。

「就職」について尋ねた際のやりとりの一部を表5に示した。この中で、A.A.さんも、前述の「報告書」に記載されたS.H.さんと同様に、「就職活動に有利になる活動をこれまで何もしていないかった。だから、何かしなくてはならない」という切迫感を有していることがわかる。さらに、このソーシャルビジネス・インターンシップの情報を、S教授の講義にて得ており、講義という情報チャネル、そして、「夏にインターンシップをやっている子がいて」という記述から、インターンシップ経験者である他の学生の行動が、行動に影響を与えたことが推測される。さらに、このインタビューの次のやりとりを見ていく(表6)。改めてソーシャルビジネス・インターンシップへの参加動機について尋ねた際のやりとりである。このA.A.さんは、先輩の「何かやっておいた方がいいよ」というアドバイスを大学3年生になる前の段階で得て

(表6),そして,ソーシャルビジネス・インターンシップ経験者の経験談を聞き(表5),参加するという判断を行っている。これはA.A.さんだけでなく,今回のインタビュー調査を通して確認された傾向であった。例えば,A.C.さんは「先輩や同期がやっているのをみて『やばい』と思ったから」,そしてA.D.さんは,「最初はあまり乗り気がしなかったが,後輩が先に参加してその成果発表を聞いてスイッチが入った」と発言している。これらから,単に情報の提供者のメッセージだけでなく,彼女らが,同世代の繋がりの中から受ける多層的な刺激や情報によって,ソーシャルビジネス・インターンシップへの参加を判断している可能性がある」と筆者は考えている。

表6 A.A.さん(女性)へのインタビュー抜粋2

質問者:先ほどと重複するんですが,改めてソーシャルビジネス・インターンシップに参加したきっかけについて教えてください。

回答者 A.A.:まあ,さっきも言ったんですが,「シューカツ用のネタ」を作ろうかなと思って,なのと・・・

質問者:誰から聞いたんですか?

回答者 A.A.:授業でこられてましたよね,・・・マチトピラ注4の方,夏前から・・・

質問者:講義は?

回答者 A.A.:はい,講義注5はS先生の講義の中で,こういうことをやってますということと,(実際に参加した学生の)体験談があって・・・

質問者:どんな印象を受けました?

回答者 A.A.:夏前の授業で来てて・・・ネタにはなるんだらうなあ,と.でも,夏は遊びの予定を・・・旅行入れちゃったし,で,その時は,流して,3年前の春休みに行きました,3年になる前になって,あ,(ソーシャルビジネス・インターンシップに参加したのは)私が3年になる前の春休みだったんですけど,先輩たちが3年生で就活が始まっているのをみて「何かやっておいたほうがいいよ」と聞いたので・・・たいていの人は「サークルとバイト」しかないということだったので・・・

質問者:行ったのはいつ?

回答者 A.A.:3年になる前の2月,3月に行きました。

質問者:就活のネタになりました?

回答者 A.A.:んー,まあ,なると思います。いっている間はなんか必死すぎて・・・

- 注1) 質問者、回答者の話し言葉を直接記述したが、前後の文脈から補足が必要と思われる箇所には括弧 () 内に情報を補足した。
- 注2) 重要と思われる箇所には文字の上に黒点を付した。
- 注3) 会話の内容が途切れる空白箇所は「・・・」で表した。
- 注4) NPO マチトピラのことであり、ソーシャルビジネス・インターンシップの仲介機関である。
- 注5) 鹿児島大学S教授が開講している講義「キャリア・恋人・コミュニケーションの社会学」を指す。

分析の最後に、今回のインタビュー調査において、予期していなかった事象が確認されたのでそれについて述べる。ソーシャルビジネス・インターンシップに参加した際に、A.A.さんが、交流したインターンシップ先の社会人(B.A.さん)についての印象を尋ねた時のやりとりを表7に示した。

A.A.さんは、ソーシャルビジネス・インターンシップ派遣先の社会人に「怒られた」ことに、価値を感じているという発言（「怒られるっているのが、久しぶりの感じです。」）をしている。併せて、参加期間中には「怒られることが、嫌でしょうがなかった」と率直な心情をも述べている。このインタビューはA.A.さんがソーシャルビジネス・インターンシップの参加期間が終了して約6ヶ月後に行い、さらに本人が、「今だからこそ、ソーシャルビジネス・インターンシップに参加していた時の様子を冷静に、振り返ることができる。」と述べていることから、これらの発言は、参加者の経験中と経験後の心情を正確に捉えていると筆者は分析している。

その前提にたつと、このインタビューにある「大学生からみた『大人』」の捉え方、そして「大学にいる先生は『大人』ではない」という発言に、「ソーシャルビジネス・インターンシップ」が広がりつつある実態に関する何らかの知見・情報が含まれている可能性があることが示唆される。そのため、この「大人」というキーワードおよび「大学にいる先生は『大人』ではない」というフレーズからの研究アプローチを研究発展の一つの軸として据えることを筆者は考えている。

表7 A.A.さん（女性）へのインタビュー抜粋3

<p>質問者：B.A.さんについて、どうですか？お世話になったということなんですが、どんなことをお世話してもらいましたか？</p> <p>回答者 A.A.：言われたのは、「レポート」^{注4} のことと言えばなんか・・・その「いつも内容がつまらない」みたいなこと言われて、凄く嫌だったんですけど、怒られてて、ホントに・・・あ、これ内緒にしてしてください・・・ふふ・・・なんだろう・・・なんですかね・・・自分的には結構、出来てるというスタンスでいたんですけど、友達とか Facebook とかであげても、「いいこと」しかいわないじゃないですか。「ああ、おもしろいね」とか「頑張っているんだね」とかみたいな感じのところ、B.A.さんからは、「全然おもしろくない」って感じで言われて、</p>

[中略]

(頑張って)書いたら「頑張たじゃん」と、言ってもらったりして、あんまり怒られるということがなかったので・・・

質問者：ん、怒られる？

回答者 A.A.：いや、その、大学の中で、ですかね、高校までは結構よく、怒られてたんですけど・・・

質問者：大学で怒られない「そこに立ってる」とか・・・

回答者 A.A.：ないですね、バイトとかでもそんなにそうそうミスがないので、怒られるっているのが、久しぶりの感じです。

質問者：ということは、A.A.さんを一番最近怒ったのは、B.A.さん？

回答者 A.A.：ですね。(笑い声)

質問者：いい経験ですね。

回答者 A.A.：はい、ですね。(笑い声)

質問者：その瞬間はうっ！と思うんでするんでしょうけど、インターンシップでしか、インターンシップらしいというか・・・

回答者 A.A.：ですね、大学って、この年代と親の世代しか関わらないじゃないですか？大人って、自分と関係ない大人と接する機会があまりなくて、部活でも友達の親、親の知り合いの大人とか、まったくつながりのない大人がバイト先しかないというか、厳しいというか・・・友達の親って優しいじゃないですか？子供の友達だし、部活の仲間だし、(ソーシャルビジネス・インターンシップでの交流は)新鮮というか、「ああすいません」という、ちょっと違った感覚というか・・・

[中略]

回答者 A.A.：毎回緊張していて、知り合いの親だったらごまかせますよね、けど、笑ってごまかせないんでちゃんとしなきゃって、でも、知らない大人と接する機会というのが凄よかったと・・・

質問者：大学では(知らない大人との接する機会は)「ない」ですか？

回答者 A.A.：ですよ。

質問者：先生は大人ではない？

回答者 A.A.：先生は違います。ちょっと・・・

- 注1) 質問者、回答者の話し言葉を直接記述したが、前後の文脈から補足が必要と思われる箇所には括弧 () 内に情報を補足した。
- 注2) 重要と思われる箇所には文字の上に黒点を付した。
- 注3) 会話の内容が途切れる空白箇所は「・・・」で表した。
- 注4) ソーシャルビジネス・インターンシップにおける実績記録を記載するための「レポート」を指す。

4. 終わりに

以上、「報告書」に依拠し、少数のインタビュー調査を通じて論を進めてきたが、これらからソーシャルビジネス・インターンシップに惹かれる若者達とそれを取り巻く現代社会について、筆者の確認した事実と獲得した問題意識を以下、提示する。

【確認した事実】

近年、世界的なソーシャルビジネスの潮流が勃興しており、日本でも政策主導による「ソーシャルビジネス」が推進され、その機運を醸成させる取り組みも行われ、地方においてもソーシャルビジネス事例が報告されている。

ソーシャルビジネス事業者は鹿児島地域にも存在している。そして、全国的な組織と連携したソーシャルビジネス・インターンシップ仲介組織によって、大学生が大学の講義と仲介機関をチャンネルとして情報を得、ソーシャルビジネス・インターンシップに参加している。

【獲得した問題意識】

「ソーシャルビジネス」のプレーヤーとなる「社会起業家」が社会から強く求められ、それらの認知を高めるための演出・装置としてソーシャルビジネス系のビジネスプランコンテスト等が展開されている可能性がある。

大学生は、「ソーシャルビジネス・インターンシップ」を「『就職活動(就活)』のネタ」として位置づけている。同世代のつながりの中から受ける多層的な刺激や情報によって、ソーシャルビジネス・インターンシップ参加を決断している可能性がある。

「大学生からみた『大人』の捉え方、そして「大学にいる先生は『大人』ではない」というキーワードおよびフレーズをインタビュー調査から得た。「ソーシャルビジネス・インターンシップ」が広がりつつある実態に関する何らかの知見・情報が含まれている可能性がある。

「報告書」と少数の経験者へのインタビューを通じた分析の積み上げによって、上記の事実と問題意識を得た。確認した事実については、情報をさらに補強していく。そして問題意識については、本稿を含むこれからの研究において、適切な仮説設定を行い、アンケート調査の定量的な手法やインタビュー調査等で明らかにしていくことを計画している。このように「ソーシャルビジネス・インターンシップ」に関わる大学生の動機の詳細な解明に向けて、先鞭とな

るキーワードやフレーズを獲得できたことは本稿の大きな成果である。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、丁寧なご指導頂いた櫻井芳生教授及びアドバイスを頂いた櫻井ゼミの皆様、そしてインタビュー調査に協力頂いた学生の皆様、鹿児島地域でソーシャルビジネス・インターンシップに関わっておられる皆様に感謝申し上げます。

文献

- 「NPO 法人 ETIC」ホームページ.(n.d.). Retrieved September 28, 2012, from <http://www.etic.or.jp/>
- 「新しい公共」宣言 「新しい公共」宣言 (2010).
- 「社会イノベーター公志園」ホームページ. (n.d.). Retrieved September 28, 2012, from <http://koshien-online.jp/>
- 「社会起業家大学」ホームページ. (n.d.). Retrieved September 28, 2012, from <http://socialvalue.jp/final/index.html>
- 「私たちの社会的責任」宣言～「協同の力」で新しい公共を実現する～「私たちの社会的責任」宣言～「協同の力」で新しい公共を実現する～ (2010).
- 佐藤真久. (2012). - 「ソーシャル・ビジネスエコシステム創出プロジェクト」における若年者の社会参加に関する評価研究 - ソーシャルビジネス (SB) に関する人材育成プログラムの開発・実施とその意義 - 最終報告書 - .
- 吉田文, 牧野智和, 河野志穂, 内野恵子, 前田崇, 堀谷有史, & 御手洗明佳. (2010). 2.「就活」に翻弄される大学生：進路意識の形成過程に着目して(III-12部会 大学生の就職活動, 研究発表 III, 一般研究報告). 日本教育社会学会大会発表要旨集録, (62), 282-287. Retrieved from <http://ci.nii.ac.jp/naid/110009358206/>
- 坪井ひろみ. (2006). 貧困女性の貯蓄・消費行動とジェンダー - バングラデシュ・グラミン銀行の事例 (テーマ：グローバル化とジェンダー). アジア女性研究, (15), 1-10. Retrieved from <http://ci.nii.ac.jp/naid/120000799310/>
- 坪井ひろみ. (2006). グラミン銀行を知っていますか - 貧困女性の開発と自立支援 [単行本]. 東洋経済新報社.
- 大室悦賀. (2009). ソーシャル・イノベーション理論の系譜. 京都マネジメント・レビュー, 15, 13-40. Retrieved from <http://ci.nii.ac.jp/naid/110007481515/>
- 山口定, 佐藤春吉, 中島茂樹, & 小関素明. (2003). 新しい公共性：そのフロンティア. 有斐閣. Retrieved from <http://ci.nii.ac.jp/ncid/BA61503814>
- 川本卓史. (2007). 「ソーシャル・アントレプレナー試論：その受容・事例・原理」. 人間学部研究報告, 10, 35-53. Retrieved from <http://ci.nii.ac.jp/naid/110007125738/>
- 松井範惇. (2004). マイクロ・クレジットとバングラデシュの貧困削減. 東亞経済研究, 63(1), 21-41. Retrieved from <http://ci.nii.ac.jp/naid/110004780815/>
- 櫻井芳生. (2012). 「内閣府ソーシャルビジネスインターンシッププロジェクト」から、見えてきたこと：「インターン」は「目の感動体験」以上のことを考えさせてくれる / ハーメ

- ルンの笛吹き男. 鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集=Cultural science reports of Kagoshima University, 76, 1-17. Retrieved from <http://ci.nii.ac.jp/naid/120004419016/>
- 水口美佳子. (2003). 小さな信用と貧困問題の解決：グラミン銀行のマイクロ・クレジットと女性たち. 北大法学研究科ジュニア・リサーチ・ジャーナル, 9, 71-99. Retrieved from <http://ci.nii.ac.jp/naid/110000562242/>
- 町田洋次. (2004). 社会起業家 - 「よい社会」をつくる人たち (PHP 新書).
- 経済産業省. (2009). ソーシャルビジネス55選. Retrieved from http://www.meti.go.jp/policy/local_economy/sbcb/sb55sen.html
- 経済産業省. (2010). 『新しい公共』の促進に向けた取組について. Retrieved from <http://www5.cao.go.jp/npc/pdf/keizaisangyousyou.pdf>
- 菅原敏夫. (2011). 「新しい公共」の政策課題 - 「新しい公共」の原理と民主党の政策 -. 自治総研, (398), 73. Retrieved from <http://ci.nii.ac.jp/naid/110008733864/>
- 谷本寛治. (1998). 企業社会システムと公共性：市民運動型 NPO の可能性. 一橋論叢, 119(5), 527-548. Retrieved from
- 豊田義博. (2010). 就活エリートの迷走 (ちくま書房).
- 鳩山由紀夫. (2009). 第173国会所信表明演説.
- ムハマド・ユヌス, 岡田昌治, Yunus, M., & 千葉敏生. (2010). ソーシャル・ビジネス革命 - 世界の課題を解決する新たな経済システム [単行本]. 早川書房.
- ムハマド・ユヌス, & 猪熊弘子. (2008). 貧困のない世界を創る [単行本]. 早川書房.